

# アイヌの人々と

## アイヌの遺跡とシカ

アイヌの人々にとってサケとシカは食料資源の双璧です。でもシカはありふれた動物なので祀られなかったともいわれます（犬飼 1952）。口承文芸でもシカはカムイ（神）が人間界にもたらす動物です。道内の間取りでもシカを送る地域はわずかでした（秋野 2004）。一方明治以前の和人の記録では、シカは家々で祀られる動物でした（大内 1861）。平澤屏山の絵にも祭壇に祀られたシカの頭が描かれています。

以上から、シカ儀礼が現在に伝わらない理由があるのではないかと思ひ、出土したシカ骨をとおしてアイヌのシカ骨の扱い方についてモデル化を試みました。

## 遺跡出土シカの類型化

シカ骨の扱い方のモデルにはA～Cがあるようです。

- モデルA：居住地から離れた場所で、シカの解体や道具の素材を取るための作業場や、利用しない部位を捨てた場所。丘陵平坦部、チャシ（砦・儀式の場など）内の住居の凹み、チャシ内に分布する例がある。頭を除く体の骨が多い。
- モデルB：シカ送りの場。コタン（集落）内外の住居の凹みや大木の根元、貝塚、チセ（家）に隣接する祭壇、チャシ内の祭壇等で儀礼が行われる例がある。シカの頭骨が多い。
- モデルC：祭壇における送り儀礼後の「納め」の場。シカの頭骨。

表 シカ出土状況による類型

モデル	遺跡	遺構	年代	遺跡名(場所)
A	非居住地	平坦面に広範囲	1667年以前	静川122(苫小牧) 厚幌1(厚真)
			1667年以後	オパウシナイ1(平取)
	チャシ	住居の凹み	17世紀中?	セタナイチャシ(瀬棚)
		遺物包含層に大規模	1694年以前	ユクエピラチャシ(陸別) ツベットウンチャシ(津別)
B	非居住地	住居跡の凹みに小規模	1739年以前	カリンバ(恵庭)
		木の根元	1667年以前	厚幌1(厚真)
	居住地	住居跡の凹みに小規模	1739年以前	ユカンボンシC15(千歳)
		コタンの近くの貝塚	1694年以前	アオシマナイ(小清水)
		チセの北東の祭壇	1667年以前	亜別(平取)
	チャシ	祭壇?	1663年以前	ユオイチャシ(平取)
C	居住地	コタンの祭壇の近く?	1667年直前	ニタツナイ(厚真)

### \* 1 商場知行制

松前藩が家臣に知行として特定地域のアイヌ民族との独占的交易権を与える制度。

### \* 2 シャクシャイン

シブチャリ地域(静内)の首長。1669年、松前藩に抗して蜂起、2カ月に及ぶ全アイヌ民族的な戦いに発展。和議成立の祝宴で謀殺された。



シカの角は中柄やヤス、銛等の材料で交易品としての価値が高く、頭骨はコタンに持ち帰る必要がありました。

儀礼後の祭壇の頭骨は別の場に移し納めたといわれます（秋野 同）。道東標茶町の虹別シュワンの送り場では、1939年に行われたクマ送りが記録されています（犬飼・名取 1940）。そこでは多くのヒグマ頭骨がオスとメスに分けて積み上げられていますが（写真1）、下顎の骨がみえません。1976年に行われたシュワンの送り場の調査では、7千点にのぼるヒグマの骨がみつき、下顎が59体分ありました（佐藤 2000）。

写真1は祭壇の頭骨を移し納めたものでしょう。当初は頭骨と一体だった下顎はやがて肉や腱が腐敗して脱落し、一方で満載になった（下顎のない）頭骨は別の場に移し納められたと思われます。



写真1 虹別シュワンのクマ頭骨（犬飼・名取 1940）  
（左がオス、右がメスのヒグマ頭骨）

# シカ

## 高橋 理 (たかはし おさむ)

千歳市埋蔵文化財センター長

1958年宮城県生まれ。88年、東北大学文学研究科国史学（考古学）博士後期課程修了。同年千歳市教育委員会就業、98年千歳サケのふるさと館出向、2007年千歳市教育委員会埋蔵文化財センター勤務、10年から現職。研究テーマは人類の食料獲得活動システム、北方先住民の礼儀・起源、変容。著書に「クマを追う人々」（2007）『アイヌのクマ送りの世界』ものが語る歴史13 同成社、「北方先住民の儀礼 ―その起源と変容―」（2007）東北大学須藤隆先生退任記念論集『考古学談叢』などがある。

厚真町ニタツナイ遺跡<sup>たるまえ</sup>では、樽前山の火山灰（1667年）の下から24体分のシカ頭骨が出土しました（奈良ほか 2009）（写真2）。下顎を欠き、オスとメスが区別された点はシュワンのヒグマに酷似しています（高橋 2009）。儀礼後に移し納められたシカ頭骨を示す例として類型Cとします（表）。

### 消えていった儀礼

シカの送り儀礼が消えた理由を考えてみます。松前藩による商場知行制<sup>あきないぼ ちようせい</sup>\*1の導入によって、和人と自由な交易は不可能になりました。一方、それまでにアイヌ社会では富の蓄積と階層化、首長による地域統一、地域間の抗争から和人ととの闘争に拡大したシャクシャイン<sup>シャクシャイン</sup>\*2の蜂起等が起きています。シャクシャインの敗北後、アイヌは和人と「交易者」から「漁場の労働者」という



写真2 厚真町ニタツナイ遺跡シカ頭骨（厚真町教育委員会）

立場に陥ります（榎森 2001）。さらに、場所請負制<sup>ばしようけおせい</sup>\*3による軽物<sup>かるもの</sup>（鷲羽・毛皮・熊の胆<sup>い</sup>など）や産物の生産や交易の管理により、18世紀中葉のアイヌ社会は解体・再編され和人への依存が不可欠となったのです。シカが和人に管理された「交易品」の一つとして位置づけられたことが、アイヌのシカへの意識の低下や送り儀礼の消失を招いたと考えられます。19世紀中葉には伝統的狩猟への締め付けや規制、禁止という経緯もありました。

一方でシカは、個体数の増減や生息域の拡大・縮小が短期間に大きく振幅します。個体数が極度に少ない冬季はアイヌが入手するのが困難となり、多いときは狩りの時間と労力の効率化を求められる中で、その送り儀礼は簡素・省略化されていったのではないのでしょうか。口承文芸における非神格化はこのような経緯によって生じたのかもしれませんが。

以上のように、シカが送り儀礼の対象から消えていった背景には、アイヌ民族の歴史的側面とシカの生物的側面がうかがえます。19世紀、早くは18世紀後半にはシカを送る儀礼は急速に衰退していったものと思われれます。アイヌが「自然」の中の一部だったのでなく、その歴史は私たちと同じ側にある」（瀬川 2007）という指摘はアイヌの動物儀礼を考える上でもあてはまるのです。

### <引用文献>

- 秋野茂樹2004 「北海道アイヌの動物神の送り儀礼―シカの霊送りを中心に考える―」『宇田川洋先生華甲記念論文集』 pp.511-525
- 犬飼哲夫1952 「北海道の鹿とその興亡」『北方文化研究報告』7 pp.1-45 北海道大学
- 犬飼哲夫・名取武光1940 「イオマンテ（アイヌの熊祭）の文化的意義とその形式(2)」『北方文化研究報告』3 pp.79-135
- 榎森 進2001 「アイヌ民族の去就（北奥からカラフトまで）―周辺民族との「交易」の視点から」網野善彦・石井進共編『北から見直す日本史』 pp.28-124 大和書房
- 大内余庵1861 『東蝦夷夜話』
- 佐藤孝雄2000 「VI 送られた動物」『クマとフクロウのイオマンテ―アイヌの民族考古学―』ものが語る歴史9 同成社 pp.73-89
- 瀬川拓郎2007 『アイヌの歴史 海と宝のノマド』講談社メチエ
- 高橋 理2009 「第2節 平成19年度 厚真町ニタツナイ遺跡出土動物」『ニタツナイ遺跡(1)』厚真町教育委員会
- 奈良智法・乾 哲也・熊谷 誠2009 『ニタツナイ遺跡(1)』厚真町教育委員会

### \*3 場所請負制

複雑化した交易が松前藩家臣の手に負えなくなったことから、交易権そのものを「場所請負人」の名目で商人に代行させた制度。